

農事組合法人小川共同農場研修報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 義弘, 伊東, 繁丸, 紙屋, 茂, 花田, 博之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10232/9894

農事組合法人 小川共同農場研修報告

松山義弘・伊東繁丸・紙屋 茂・花田博之

研修地及び日程

研修地 農事組合法人 小川共同農場
鹿児島県揖宿郡山川町小川 500
日 程 平成 8 年 3 月 21 日

研修概要

研修地は薩摩半島の南に位置する揖宿郡山川町の小川共同農場である。小川農場は鹿児島県でも最大規模の肉用牛肥育農家で、約 600 頭飼育している。現在の経営規模は土地が 800 a（借地を含む）、労働力は 5 人（男 2，女 3）である、飼料作物はイタリアングラス栽培を中心にした作付け体系にしている。

小川さんは指宿中（旧制）を卒業し、農家の後継者として農地面積が 18 a からスタートした。これまでに至るまでにはきびしい生活体験をしたことを含め、規模拡大してきた経過を詳しく話してくれた。

これまで規模拡大出来たのは、1959年（昭和34）に 8 カ月間派米農業実習生として畜産の実態を学んだことが大きく影響しているとのことである。畑作経営から脱皮し、肉用牛主体の経営に移行するため、1981年（昭和56）に農事組合法人小川共同農場を設立した。

経営の工夫として、素畜は価格が安く血統の良いものを奄美群島、種子島及び屋久島等離島から多く導入している。素畜は過肥でなく肥育のやりやすい牛を選抜している。地域との関係では、周りが園芸農家が多いためイモヅル、野菜クズ、その他一般的に捨てる作物の茎葉等を堆肥と交換して家畜の餌にしており、近隣農家相互の経営に役立つようなシステムを作り上げている。

経営の把握を明確にするために、1988年（昭和63）にワープロを導入、肥育牛の管理システムのプログラム開発と高級牛肉生産へ方向転換をした。1989年（平成元）にはワープロをパソコンに切り替え、管理システムを充実した。

畜舎は建物の古材等を有効に利用している。しかし、近年に建てた建物は鉄筋造りで、農機具は規模拡大にあわせ大型化している。肥育前期では運動場を利用し、1群20頭程度で、長い飼槽で畜舎周辺にトレンチサイロに貯蔵したサイレージを中心に地域で取れる園芸の副産物等も給与している。中期からは 3～5 頭の小頭数で群管理をしている。畜舎の構造の特徴は、牛の後ろを 1 段低くし、その後堆肥を機械で押し出す構造である。堆肥は地域の園芸農家に還元するが、畜舎周辺に野外蓄積しているために臭いがしている。

生産コストに直接影響する濃厚飼料は民間の飼料会社と直接取り引きに切り替え、1頭当たりの総生産費が 28 万円になるよう目標を設定している。これからの目標は枝肉の上物率を 8 割以上に高める肥育技術の向上、生産コスト低減のために内外の情報を的確に把握すること等が重要だと強調している。

感 想

大学の農場では研究が中心であるため、経営面についてはそれほど正確に把握されていない。入来牧場でも生産コストを正確に把握し、経営管理を合理化する必要性を痛感した。そのためには今以上に緻密な記録と、結果の多面的分析を行う必要がある。また、小川農場でも課題になっているように、入来牧場でも堆肥を資源化するための有効な処理法の開発が不可欠であると思われる。